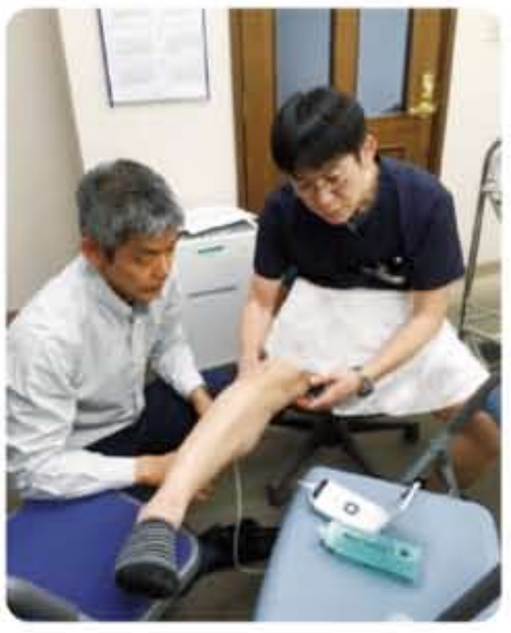
養生会の訪問診療の取り組みについて

訪問診療課

養生会では、昨年から在宅患者さんの主治医制を廃止し、複数の医師による「グループ診療」を始めました。在宅患者さんやご家族の「最後まで長年住み慣れた場所で暮らしたい、終の棲家での生活を続けたい」という希望をできる限りサポートし、在宅患者さんの不要不急の救急搬送や入院を減らすためにも、グループの医師が一貫した医療の提供をできるように協力して診療しています。

養生会の訪問診療課では、毎月ミーティングと共にスキルアップセミナーを開催しています。

ミーティングでは、患者さんの情報交換の他、終末期の話しや入院が必要な方の相談、介護をしている家族が抱える問題、薬剤の適正な使用方法など、毎回新しい学びとともに熱い議論が繰り広げられています。近隣の診療所の先生の参加もあり、簡易超音波検査機器を用いたスキルアップセミナーも同時に開催しています。



６月は、高齢者の多剤服用について学びます。毎月開催していますので、興味のある先生方、看護師の方がいらっしゃいましたらお問い合わせください。

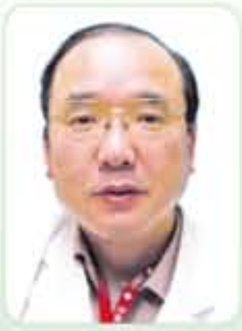
次回開催予定：６月７日（水）　16時30分～18時

かしま病院フェイスブック
https://www.facebook.com/youjyoukun1983/

今村復興大臣の失言

悲しみの程度は、人それぞれ異なります
強制避難者と自主避難者の悲しみ

ひんがら目(120)



今村復興大臣が失言をし、辞任に追い込まれました。失言は2度でした。１度目は、「震災で自主避難したのは自己責任でしょう」というもの。２度目は、「地震が起きたのが東北でよかった」というもの。東北の被災者の気持ちを逆撫でし、被災者に寄り添うべき復興大臣としては不適任であると非難されました。

最初の失言の場面をテレビで見ていて、質問した記者に大臣が、「出て行け！二度と来るな！」と罵声を浴びせる光景には驚きました。しかし、記者が被災者の気持ちが分からないのかと大臣を責める姿にも違和感を覚えました。この記者は本当に被災地の人の生の声を聴いているのだろうか？被災地の人たちは皆一様に不幸だと独善的に思い込んでいるのではないだろうか？あなたこそ被災者の気持ちを理解しているのですかと質問したくなりました。

被災者が大変な悲しい思いをしたのは事実です。しかし、被災者の悲しい気持ちが皆一様であるというのは錯覚でありマスコミが作り上げた幻想でしょう。こうした幻想を背景に復興再生を一律にモノトーンで語る姿勢が一番大きな問題です。

いろいろなレベルの被災者がいます。放射線量の問題で強制的に避難させられ行政の指示に従い避難場所を転々とし仮設住宅で不自由な暮らしをした人。こういう人たちの悲しみは、愚生のようないわき市民の悲しみとは比較できないものでしょう。

しかし、放射線量が基準値を超えておらず行政的には避難指示はないが、基準値以下でも不安が拭い去れず遠くの土地に避難した人の悲しみは、不安があっても避難しなかった人の悲しみと、客観的には同等とみなすべきでしょう。いわき市から自主避難した人が感じた悲しみと、避難しなかった我々多くのいわき市民が感じた悲しみには大差はないでしょう。許容されている放射線量でも不安に感じる人はいるでしょうが、行政に補償を求めるときには節度が必要です。主観に走りすぎず、同じような境遇の人がどう思っているのかを忖度することです。直接甚大な被害を受けた人は厚く補償されるべきですが、被害がさほどでない人が一緒になって同様の補償を要求するのは控え、節度ある補償で納得すべきでしょう。

愚生も震災直後には、郷里鳥取の知人から「送って欲しい物があったら何でも送るよ」と促されましたが、「困っていません」と言って固辞しました。好意を踏みにじったようにも見えます。現状を知らない知人は何でも送ってくれたかも知れませんが、現実を知ったときに相手に不信感を起こさせるような行為は慎まなければなりません。それが節度です。呉れるものなら何でも貰えという雰囲気では自助努力は芽生えず、いつまでたっても復興しません。

復興大臣は、被災者の立場に立たないといけませんが、同時に国民全員の視点に立って、被災地を復興させる責任があります。マスコミに同調して復興大臣をバッシングするだけでなく、大臣の言わんとしたことにも一分の理があることを心に留めるべきでしょう。

（呼吸器科　部長　山根 喜男）